

春風秋霜

11月号

平成28年11月1日

島田市教育委員会日より
教育長 濱田和彦

春風をもって人に接し、秋霜をもって自らを慎む 佐藤一斎

1 学校訪問を通して

島田第一中学校では、興津校長から「治にいて乱を忘れず」という話を聞きました。同じ趣旨のことを島田第二中学校からも聞きました。島田市の中学校は、近年大変安定し、問題行動は大変少なくなっています。しかし、安定期ゆえの慢心が次の乱れにつながるという意識をもっていることに、深く感謝するところです。

以前、元初倉中学校長の井鍋さんから、「共用の場の乱れは、心の乱れにつながるので、教室ロッカーの上をきれいにすることを徹底し、教室を安定させた」という話を聞いたことがあります。不登校の増加を乱れの予兆と捉え、危機感をもっている学校もあります。どこに危機意識を持つかは様々かもしれませんが、ちょっとした油断が大きな乱れにつながるという意識は大切だと思いました。

また、楽しくて分かる授業を大切にすることが、学校の安定のためには重要だと考える学校が多いことにも感謝しています。アクティブラーニングを意識し、グループ学習における自主的・協働的な追及や学習課題と振り返りがしっかり連動した学習も増えています。島田第二中学校では、全クラスに8枚ずつ小さなホワイトボードを用意し、グループ学習に活用しています。どんな授業を目指しているのかが、生徒にも保護者にも良く見える取り組みだと思いました。実践の見える化も大切にし、今後の授業改善に期待しています。

2 信用失墜行為の根絶について

10月13日（木）に市町教育委員会教育長・教育委員長会が、県総合教育センターあすなろで行われました。その中で、今年度（高校を含む：9月5日現在）の懲戒処分について説明を受けました。校長の管理監督義務違反2件を除くと、9件で教職員が処分されています。わいせつ行為や飲酒運転、薬物所持の免職をはじめ、時間外勤務を過小に報告させた事務長の減給処分や、女性職員に対するセクハラの停職処分もありました。

信用失墜行為は、本人だけでなく学校の信頼を大きく損ないます。そして、信頼回復には長い時間と大きなエネルギーを必要とします。仲間や学校を守るためには、違和感を持った時にそのことを本人や管理職に伝えることが大切です。違和感をそのままにして、事件に発展しては誰のためにもなりません。違和感を共有するために、『笑顔・やりがい・仲間』が大切にされる職場づくりをお願いします。

3 モンゴル・ナラン外国語学校生徒について

10月6日（木）から来日していたモンゴル学生友好親善使節が、10月24日（月）に帰国しました。北中学校と島田第一中学校に受け入れをお願いしましたが、交流も回を重ね、自然体での交流ができるようになってきたことが、双方にとって大きな成果だと思います。

島田第一中学校では、室内にモンゴルの子供たちがいても違和感なく授業が行われていました。古文の授業は苦勞している様子でしたが、ノートは日本語でしっかり書かれていました。

帰国報告会では、家庭科の手で捌いた鯛で作ったつみれ汁や海に



調理実習中のガンバートル君

服のまま入ったことが楽しかったと話してくれました。また、自転車に乗るお年寄りの多いことにも驚いたようです。日本では当たり前でも、平均寿命が50歳代の国から見れば驚くことなのです。彼らは、たくさんの思い出を持って帰国したと思います。彼らが、日本とモンゴルの架け橋になることを願っています。

モンゴルの子供たちと話す学ぶことがたくさんあります。一つは、どの子供も自分の夢をしっかりと語れることです。以前、勤務していた学校の生徒に夢について尋ねた時、答えることのできない子供も多かったのに比べ、素晴らしいと思いました。また、自慢できる特技を持っていることにも感心しました。昨年の全国学力・学習状況調査で小学校のキャリア教育が全国平均を大きく下回っていたことを考えると、キャリア教育とは、自己肯定感を高めることや夢を持つ教育を充実させることでもあると認識し、日々の指導を充実することが重要だと思えます。

4 いじめ問題について

いじめ関連の自殺事件が全国で起き、ニュースで取り上げられています。いじめによって心に大きな傷を負う子供を無くすことは、教育界の大きな責務だと思えます。

最近、人権教育啓発推進センター発行の冊子「アイユ」にいじめを受けた中学生の作文が載っていました。

クラス全体から無視されたり、悪口を言われたりして苦しんでいる時、学校が行った『いじめについてのアンケート』にいじめられていると答えたことによって救われた事例です。いじめは認知しにくいものです。各学校は、定期的にアンケートを行っていますが、心配な様子が見られたら、臨時のアンケートを実施することも大切です。

いじめは、被害者本人からの訴えやサインが無い場合もあります。しかし、子供たちの様子から推察できる場合もあります。多数決による一見民主的な方法を取りながらも、特定の子供をグループに入れないようにしたり、学級会で無理な役を押し付けようとしたりすることもあります。いじめは、どこでも起こるという認識を持って、教師は学級を見なくてはなりません。個人で判断が難しい場合は、組織で見守り、情報を共有することも大切です。絶対にいじめは許されないという教師の姿勢も大切です。

肘かけ椅子

孕石 晃 文化課長

『中野和馬展から見えてくる「抗い」と「志」、そして「文化」』

嵐のように、43歳の若さで陶の原野を駆け抜けた陶芸家「中野和馬」。権威や常識などの既存なものに抗（あらが）いながら、独自の表現・真の創造を志向した。彼の作品展が、10月29日から1月15日までの会期で、島田市博物館の本館と分館で始まった。

中野和馬の作品を見ていると、彼の「志」と「抗い」というワードによって、過去の様々な思いが駆け巡ってきた。昭和58年に金谷町役場に奉職してからのこと。任せられたそれぞれの職場で、時の町長や助役、時には苦情を持ってくる市民に対して、心の葛藤があり現状を動かすために自分自身の意思を表現してきた。しかし、抗うことは難しい。「人間力」が透けて見えてしまうのである。「誇り」を持ち、「志」を強く持っているからだと言っても、周囲が共感してくれなくては、ただの反発で終わってしまう。和馬の作品は、とにかく訴えかけてくる。彼の「抗い」が新たなものを生み出し、共感を呼び起こす、そこには彼の「文化」がある。

「文化」という言葉は、格好のいい言葉であり、使いやすい言葉であるから、どこにでも溢れている。しかし、「文化」には「志」が必要である。現代は、大きな「志」を持ってない時代なのかもしれない。それだけに「文化」を担う者として、中野和馬のように「抗い」を忘れずに「志」を持ち続け、「文化」への理解を拡げていきたい。